

第二位

クリエイター

電子工学科二年 池田健太郎

もしも、鳥のように空を自由に飛べたら。もしも、自ら乗り込んで自在に操れるロボットがあったら。もしも、自分そっくりのロボットがいて宿題をしてくれたら……。

小さい頃、誰でも一度はそんなことを考えたことがあるだろう。私もそんなガンダムやドラえもん、スーパーマンのような存在に憧れたひとりである。不思議な力で大空を自在に飛び回り、助けを呼ぶ声に一目散に駆けつける。人知を超えた怪力でバスでも橋でもひょいを持ち上げ、あっという間にもと通り。山のような宿題も、ポケットから出てくる不思議な道具でちょちょいのちょい。換装すれば深海だって宇宙だって地底にだって自由に行ける。

しかし、そんなことは漫画の中だけの話で現実にそんなロボットができるはずがない。誰だってそう思っていただろう。

ところが、それを夢物語で終わらせなかった人たちがいた。現在、世界中のいたるところで開発が進められ、一步また一步と実現に近づいている。最初はクモのような形をしていたが、今では二本の足で立って歩き、楽器まで演奏できるようになった。ロボットアニメに憧れた自分としては実に喜ばしいことである。

また、人型ロボットの開発と並行するかのよう、生物の遺伝子を組み換える研究も進歩してきた。植物に対して行なわれ始めた実験も、今では動物へ、そして人へとその対象を移してきた。「害虫に強い作物を作る。」「農薬にも強い作物を作る。」そういった目的で始まったこの研究は、最近では形を変えて医療の現場で生きている。例えば今まで取り除くことが困難だったガン細胞を、その遺伝子を組み換えることによって死滅させるといったことができるようになったのである。

これらは一見すると人類の輝かしい進歩に思える。だが、よく考えてみてもらいたい。確かにロボットができたおかげで危険な場所での作業や観測なども行なえるようになったし、遺伝子治療ができるようになり多大な危険を伴う手術もしなくて済むようになった。しかし、本当にそれだけだろうか。

まず、ロボットの場合で考えてみる。私達は無意識のうちに「ロボットはプログラムされたことしかできない。だからロボットは道具である。」と思い込んでいる。だが、これが

らの時代にはそれは大きな間違いである。ロボットはどんどん進化している。最新のロボットはプログラムされたことだけでなく、今までのデータと複合してより適切な行動をとることが可能である。これはヒトが行動するときと同じ、あるいはヒト以上に経験を生かしているかもしれない。ただ、全く新しいことを考え出すという点においてはヒトの方が優れていると言えるだろう。しかしながら、現代人は新しいことをひらめく力が徐々になくなってきている。このまま、ロボットとヒトの思考に差がなくなっていったら、一体どうなるのだろう。人類がロボットの道具になる日もそう遠くない。

次に、遺伝子組み換えについて考えられることを述べる。

植物に限ってのみ進められていたこの研究は、「ヒトゲノム計画」と呼ばれる人間の遺伝子を解析するプロジェクトの終了とともに飛躍的に進んだ。このプロジェクトの結果、遺伝子のどの配列が何を司っているかということが正確に分かったので、生まれる前の胎児の遺伝子を調べ先天性の病気があれば治療するといったことが可能になった。もともとあった要素を取り除くことが出来るということは、逆に新しい要素を加えることも可能だということである。極端に言えば、超能力や不老不死といった普通ではありえない能力を人工的に作り出せるのである。先日、持久力が他の個体の約二倍もあるねずみができたというニュースを新聞で見かけた。こんなことを人間に対して行うようになったら、「スパイダーマンの兵隊」のようなものが普通に作られるようになるだろう。どこかの戦争が大好きな国にはのどから手が出るほど欲しい技術である。これに加えて、クローン技術まで人に適用しようとしているのだから大変である。「世界に一つだけの花」でも歌われているように、オンリーワンだから価値があるのだ。それなのに自分で自分の価値を無くすような事をして、正に愚の骨頂である。

これまで述べてきたように、人間の技術が進歩するに連れてどんどん人間の価値が失われつつあることが、私にはとても怖い。技術の進歩はいいことだと思う。現に私自身、技術者になることを目指してこうして電波で学んでいる。しかし、その中でも人として越えてはいけない一線がある。人は神ではないし、大いなる自然の代弁者でもない。命を己の意のままに操っていい権利など誰も持っていない、いや、持てはいけないのだと思う。その昔、ナスカやインカを始めとする数々の古代文明があった。それらの遺跡からは、それらの文明が現代に引けをとらないほど高度に発達していたことを物語る壁画や装飾品が多数見つかっている。私には、今は無きそれらの文明が、技術だけが先走ってもそれを扱う精神の発展が伴っていないと必ず滅びるという警告を、遺跡に託して私達に伝えようと

しているように思える。

今後、技術の進歩だけに心を奪われて他の命を不幸にすることの無いよう、またそういう環境に陥らないよう、自分自身技術的にも精神的にもしっかり進歩していきたい。

「メトロポリス」 手塚 治虫 角川文庫